

私が俳句といふものにほんたうに興味をもったのは、蕪村の句を見てからであった。私か大學に入って千駄木に下宿するやうになり、夜など、友達でも来ない時は。よく一人で本郷通を散歩した。夜店の古本などひやかして、歸って本を讀んだ。

その夜店で、四冊から成る熊村句集講義といふものを見つけ買った。それは、子規、鳴雪、碧梧桐、虚子、紅緑、四方太、露月、青々等の蕪村の句の輪講であった。ホトトギスに載せたものであるが、春夏秋冬に分類して、四冊にしたものであった。これを見つけた時の嬉しさ、もつてゐた小遣をみんなはたいて買った。

その頃は、下宿代が六疊の室、三食附で十三圓といふ時代だったから、二、三圓の小遣をもつてゐるといふことは景氣のよい方であつた。月初めでもつてゐたのだ、それを見んなはたいた。

私は毎晩のやうに蕪村句集講義を讀んだ、そして俳句は面白いと思ひ、俳句といふものは、かういふものだとしわかつたやうに思った。

その後のことだが、蕪村遺稿講義といふ補遺四冊も手に入れて、これら八冊は今でも私の書齋に愛蔵してゐる。

蕪村は天明時代の俳人であるが、元來畫家である。だから蕪村の俳句は寫實的で、繪畫的などころが多い。子規が蕪村を發見して、研究し、世に紹介し、自らもその多くを學んだ。子規が寫生といふことを言ひ出したのも、或は蕪村を研究しながら得た一つの収穫だったかも知れない。

子規か蕪村を發見したと言つたか、勿論前から蕪村はあつただけけれど、蕪村をそんなに價値あるものとはしてゐなかつた。子規によつていろいろ究明され、認識を新たにし價値づけられたのであつた。

かういふわけで、私か俳句を勉強したのは、いきなり蕪村に入つたと言つてもよい。

この方法はよかつたか、悪かつたか決められないが、さういふことであつた。

それから芭蕉を讀んだり、子規を讀んだり、其角を讀んだり、ホトトギスを讀んだり——といふことになつたのである。

私は何故、芭蕉を先にしなかつたか——それは芭蕉といふものに興味をもつ動機が與へられなかつたからである。もし芭蕉講義とでもいふものが座右にあつたら、芭蕉にとび込んだかも知れない。芭蕉の句だつて、その以前に幾らか讀んだりしたけれど、その中に人つて行く勇氣も興味も起らなかつた。それは芭蕉の俳句が私に難しかつたか、それとも、さういふさび、しほりの面白さがわからなかつたか、とにかく蕪村のやうに直ぐ心持に合はなかつた。蕪村の句は、繪を見るやうに私に印象あざやかに映つた。それに子規とか、鳴雪とか、虚子とか、碧梧桐とかいふ人達の言ふことも面白かつたからであらう。（次号へつづく）